

還暦か・・・



上川北部医師会
名寄市立総合病院

もり た かず とよ
森 田 一 豊

いつの間にか還暦である。昔、子供のころ、60歳といえば爺さんであった。そういえば、60歳になった某教授の前で患者のプレゼンテーションをするときに、「この患者は60歳で高齢なので」と言ってしまう、「あ～た（あなた）、60歳はまだ高齢ではないでしょう？」と言われたのに、「十分年寄りです！」と言い返して上級医の肝を冷やした思い出の60歳だな・・・と感慨深い。実際に60歳になって、昔感じていた年齢から思う大人感は全くない。いつも悩むので、昔の人の40歳（不惑）にも到達していない。まあ、暇があればゲームをしたり、漫画を読んだりして、およそ大人にならずに中二病真っ盛りといった状況だから大人になり切れないのだろう。それでも最近は、MMORPGなどのゲームに集中できなくなった分、休みの日はDIYや釣りをするようになり、少し生活が変わってきたように思う。20歳台に買ったゴルゴ13の単行本をとうとう終活を考えて捨てることにした。少し寂しい気もするが、本のあったところに釣りの道具が入るようになっただけなので、本当に終活といえるかどうか怪しいものである。そういえば、高校生の時に、お金がなくてあきらめていた電子工学の趣味も今なら、理解力とはもかく、少なくともお金に困らずやれるかも・・・と夢を膨らませている自分に気づく。そういえば、終活って必要なのだろうか？ 死んだあと、ごみのようなもので子供が大変な思いをさせないようにということで、ものを整理するということらしいが、終わりを意識してやりたいことをやらずに生きていても楽しくないのではないかと思う。終活などということは考えずに、やりたいことをやってぼっくり逝く方がいいだろう。終活など考えずにAmazonでポチッとすることにした。「やりたいことをやってぼっくり逝く」で思い出したが、「働き方改革」は迷惑な行政の押し付けである。若い時は体力のままに働いて稼ぎたいものである。ほかの病院の当直にいくと時間外労働とみなすとか訳が分からない。嫌々仕事をさせられると不満がたまってしまいが、仕事が趣味のように楽しいときは少々寝なくても死なないものである。「私の若いころは・・・」と書いたところで、年寄りくさい考え方だなと反省して終わりにすることにした。

音のシャワー



札幌市医師会
石橋胃腸病院

あり ま しげる
有 馬 滋

古希を過ぎた私の一番の楽しみは地下のオーディオルームにこもって、レコードから流れる音の波を浴びることです。部屋いっぱいキラキラと飛び交う音の響きはまるで「音のシャワー」のようです。

30数年前に私が家を新築した頃はまだオーディオルームを持つことが流行っていた時代で、私もオーディオ好きの友人に勧められかなり無理をし、家内の反対を説得してなんとか地下にオーディオルームを作りました。

その頃はまだレコードが主流でしたから、新しく登場したCDと何度も聴き比べたものです。最初はクリアーでしかも静寂の中から湧き上がるCDの透明感のある音の美しさに驚きましたが、間もなくCDはレコードに比べると音がか細く、部屋中に充満するパワーが不足していると気付き物足りなさを感じるようになりました。レコードからの音は分解能は劣るもののその響きは波のように部屋いっぱいに広がり、聴いている私の体を心地よく包み込んでくれます。またレコードではカッティングの違い、盤質の違いでその音が感動的に変わることがとても魅了的などころです。

名盤と言われる良質なレコードで巨匠たちの演奏を聴くのは本当に至福のひと時です。

ミケランジェリの弾くドビュッシーの「映像」では、七色と讃えられるピアノの音が幾重にも重なり合って響き合い、水面に反射して美しく輝く光をも感じさせますし、ブルックナーの交響曲 第7番の冒頭のホルンの響きに浸ると、まるで自分が空中に浮かんでいくような感覚になります。

このような名盤の妙なる響きはCDではなかなか味わえないものです、まして今の時代は音楽をパソコンやスマホの貧弱な音で聴くのが主流のようですから、レコードの音の素晴らしさを文化として残したいものとかねがね願っております。聞くところによりますと、英米ではCDよりもレコードの売上が多くなったそうです。日本でも今年がレコード復興の年になってくれればと願っております。